特集「インタラクション：技術と展開」の編集にあたって

椎 尾 一 郎†

本特集は，2004 年 3 月に学術総合センター一橋記念講堂で開催されたシンポジウム「インタラクション 2004」（実行委員長：星 徹，プログラム委員長：椎尾一郎）に連動した企画である．シンポジウムの発表者をはじめ，会員一般に広く投稿を呼びかけ，幅広い研究分野から，インタラクションの技術と展開に関係する研究論文を集めて編集した．

「インタラクション」は 1997 年から毎年開催されており，本特集はこれに連動する 6 回めの特集になる．「インタラクション 2004」は，ヒューマンインタフェース研究会，グループウェアとネットワークサービス研究会の主催で開催された．本シンポジウムは，毎年順調に参加者を増やしており，ユビキタスコンピューティングシステム研究会を含めた 3 研究会主催になった最近の「インタラクション 2005」では，600 名の参加者を集めるまでに発展している．

「インタラクション」の盛況が示すように，インタラクションに関連する研究活動はますます活発になっている．これらの研究に論文化の機会を提供する本特集の重要性も増大しているといえる．また，最近のヒューマンインタフェース研究動向は，仕事としてコンピュータを利用するコンピュータ・ユーザ間のインタラクションのみならず，一般的な日常生活の場面における，日用品としてのコンピューティングをも対象とする方向へと展開しつつある．そこで本特集には，「技術と展開」というサブタイトルを付加し，幅広い研究分野からインタラクション技術の新展開に関するテーマを募集することを意図した．今後の新しいコンピュータ利用の可能性を示す本特集の論文が，専門を限らず，多くの本学会員にとって有意義なものになれば幸いである．

本特集はゲストエディタ制により，下記の特集号編集委員会の責任で編集を行った．査読の手続きは，10 名のメタレビューワが投稿論文を約 3 本担当し，各編 2 名（テクニカルノートは 1 名）の査読者による並列査読の報告に基づいて，メタレビュー処置案を作成し，特集号編集委員会において慎重に審議のうえ，採録/不採録/条件付採録を決定した．投稿された論文は全 28 編（うちテクニカルノート 1 編）であった．査読者，編集委員，および照会に対応していただいた著者のご尽力により，最終的に 15 編（テクニカルノートは採録なし）の論文が採録となった．採択率は，54%である．

特集号目次作成にあたって，本学会論文誌キーワードに準拠してカテゴリ化した．これを前回の特集号と比較すると，新たに登場したカテゴリに，タンジブルコンピューティングとメディアアートがある．前者のカテゴリが示すように，生活のあらゆる場面におけるインタラクションの展開という今回のテーマに沿って，仕事や生活空間にとけ込んだユビキタスコンピューティングや，日用品の分かりやすさと直接的な操作を生かしたタンジブルなインタフェースに関する最新の研究を採録することができたと考えている．

また，もう 1 つの傾向として，メディアアートをテーマにした投稿が目立った．特集号編集委員会では，これらの論文の採否方針について突っ込んだ議論が行われた．その結果，本学会論文誌として採録すべき論文には，技術的な寄与もしくは，インタラクションに関する普遍的な知見が含まれているべきであると合意に達し，このことを採択の判断基準とした．このため優れたアート作品であっても，残念ながら採録に至らない結果となった論文もあった．今後は，編集委員会などでの議論を重ねたうえで，アート系論文の明確な査読方針を募集要項等に記していく必要があると思われる．

最後に，本特集の実現にご尽力いただいた，著者の方々，査読者，特集号編集委員，ならびに学会事務局の皆様に，深く感謝いたします．

「インタラクション：技術と展開」特集編集委員会

- 編集長
  椎尾 一郎（お茶大）
- 編集委員
  五十嵐健夫（東大），大野健彦（NTT），小池英樹（電通大），角 康之（京大），中内 靖（筑波大），中小路久美代（東大），増井俊之（産総研），間瀬健二（名大），安村通晃（慶應大），暦本純一（SONY CSL）

† お茶の水女子大学理学部情報科学科
Faculty of Science, Ochanomizu University